

労働運動の価値を次世代へ

～実体験から学んだ活動と継承～

こが はつよ
古賀 初代

●印刷労連 副中央書記長

私が労働組合の存在意義を強く実感するようになった背景には、前職での苦い経験がある。当時の職場には労働組合が存在せず、業務に対する評価もフィードバックもなければ、正当な残業代すら支払われない、今となってはあり得ない労働環境だった。そうした理不尽を肌で感じてきたからこそ、転職した今の会社で、「労働組合」に出会い、その役割と重要性を深く理解することができたのだと思う。

今では当たり前のように、ほとんどの女性が産休・育休後復職をしているが、当時は法を上回る制度が整っていたものの、育児休業の取得実績は皆無であり、「女性は結婚・出産を機に退職する」という風潮があった。私自身も第一子の妊娠時に「いつ退職するのか」「子どもをすぐに預けて働くななんてかわいそう」といった心無い言葉をかけられ、無意識の偏見（アンコンシャス・バイアス）に基づくハラスメントに直面した。「制度が整備されていても、組織の風土や職場の一人ひとりの意識が伴わなければ意味がない。この環境をなんとか変えたい」という強い思いが、私の組合活動の原点となっている。

第一子出産後、職場復帰したタイミングで組合役員に選出され、第二子の産休に入るまで執行委員と厚生部長を務めた。その後、第二子出産・育休を経て復帰した後、家事や子育てとの両立のため「内部の役割に専念し、外部活動は控える」という条件のもとで再び組合役員を引き受け、労使協議等に取り組んできた。

転機となったのは、副委員長4年目に経験した地方協議会の体制変更に伴う外部活動への参画である。

それまでは、「自分なりに積極的に活動してきた」という自負があったが、他組織との情報交換が自組織の活動にも非常に有意義であることを知り、自身の視野の狭さを痛感させられた。さらに、並行して担った連合埼玉女性委員会では、多様な産業で活躍する仲間と交流する機会に恵まれた。組織の規模や事業環境によって取り組み状況は異なるものの、抱えている課題は同様であることを知り、共に課題解決に向けて取り組んだことは、私にとって大きな学びとなり、貴重な経験となった。また、外部活動を通じて得た知見は自組織の交渉をより建設的なものへとし、私自身のキャリアにとっても、重要な経験だったと感じている。何より、業界の枠を超えて連帯し、多様な課題を共有し合える同志たちとのネットワークは、今でも私の大きな財産である。

現在は産別役員として、産業政策の実現やジェンダー平等の推進、組織の充実・強化では特に中小加盟単組の課題解決に日々奮闘している。しかしながら、全国の労働組合組織率は約16%にとどまり、いまだ多くの労働者が十分なセーフティネットに守られていない。同時にあらゆる組織が「次世代への継承」という共通の構造的課題に直面しているように思う。

労働組合の重要性や、活動を通じて得られる自己成長という魅力を、いかにして次の世代へ語り継ぐか。これまでの労働運動を通じて得た知見や学び、そして活動への熱意を、これからの未来を担う後輩たちへとしっかりと繋いでいきたい。